

(PDF版・3の13) 『教会教義学 神論 I / 1 神の認識』 「五章 神の認識 二十六節 神の認識可能性」 「一 神の用意」

(文責・豊田忠義)

「五章 神の認識 二十六節 神の認識可能性」 「一 神の用意」 (115-231頁)

「一 神の用意」

「〔第三の形態の神の言葉に属していない〕対話の相手が、……信仰は、彼に対して有名な『理性の策略』〔すなわち、ヘーゲルの歴史哲学における「理性の術策」、「理性の詭計」、「理性の狡知」〕を用いようとしていること、換言すればまさにそれは聖書のことであるが、第二の形態の神の言葉である<使徒>・パウロの「わたしは、神からいただいた恵みによって、〔第二の形態の神の言葉に属する<使徒>として〕熟練した建築家のように土台を据えました。そして〔第三の形態の神の言葉に属する〕他の人がその上に家を建てています。ただ、〔聖書こそが教会に宣教を義務づけている〕その教会の宣教は、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての神、その神の啓示、その神への信仰を対象としている限り、〕おのおの、どのように建てるかに注意すべきです。〔啓示ないし和解の实在〕そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉である〕イエス・キリストというすでに据えられている土台を無視して〔恣意的独断的に「わがまま勝手に」〕、だれもほかの土台を据えることはできません（Iコリント3・10-11）」という信仰の<立場>においてではなく、包括的言えば神とは異なる「实在全体」——すなわち宇宙を含めた天然自然としての外界、自然の一部としての人間の自己身体、性としての他者身体、個体的自己としての全人間の身体（肉体）と身体を座とする精神（意識）を介した普遍的で実践的な全自然（自然の一部としての人間の自己身体、性としての他者身体、宇宙を含めた天然自然としての外界）との相互規定的な対象的活動によって生み出されるところの人間化された自然としての人間的自然である人間の物質的および観念的な諸生産物（マルクス『経済学・哲学草稿』）としての「存在者」、「存在者レベルでの神」、「存在者レベルでの神の啓示」、「存在者レベルでの神への信仰」を尋ね求める『自然』神学」を前提としたその<段階>における思惟と語りを用いようとしていること〕、……それ故に人が〔信仰の側の人が〕、〔第三の形態の神の言葉に属していない〕彼に向かって語ることもただ仮面をかぶって語られているだけであり、もともと非本来的に語られているに過ぎないということを見出すならば、その時、彼は、当然のことながら、……二重の意味で馬鹿にされ欺かれていると感ずるであろう」、第三の形態の神の言葉に属していない「彼は、……言葉で思っていることをはっきりと言わない信仰、不信仰の立場をただ<外見>だけ取っているように見せかけるために、自分自身の立場を<捨てる>信仰に対して、〔逆に〕自分を閉ざし、また態度を硬化させるであろう」。そうした「自然神学が不信仰に対して、（自

然神学が意図していることが……成功して) 新しい故郷を……提供する場合にしろ、あるいは自然神学が自分の意図に反して、不信仰が(……自分に提供された故郷を……断念することによって) 同時に信仰を断念する可能性を提供する場合にしろ、いずれにしても自然神学は相手の〔不信仰の側の〕心を頑なにさせる仕方で働くであろう」「このディレンマは、「確かに……不信仰をも導いて行きたいと思っている」すべての『キリスト教的』自然神学の矛盾を暴露しているのである」。その「矛盾した姿を暴露」された「『キリスト教的』自然神学」の企てには、「ただ単に事柄に関してだけでなく、また人間、世、不信仰に関する誤謬〔換言すれば、ただ外在的な不信仰という一面的な観点しか持たないところの「不信仰に関する誤謬」、それ故に信仰の側にも内在する内在的な不信仰の問題を、信の側の「自分自身の中にただ不信仰だけを見出す」その内在的な不信仰の問題を認識し自覚していないところの「不信仰に関する誤謬」、ただ単に〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている〕真理を損なうだけでなく、また……〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている〕まさに愛をこそ損なう誤謬……が、明らかに〔人間学そのものとしての〕教育学的誤謬であることによって、それとして正体を暴露する神学的誤謬が存在している」。そこにおいては、「対話相手として問題となって来る不信仰の人間」は、「『キリスト教的』自然神学」の側が「自分自身のところまで引き上げてやめるためにただ身をかがめて調子を合わせさえすればよく遊んでいる子供>ではない」。ましてや高度情報科学と高度情報技術による高度情報社会下においては、そのような「『キリスト教的』自然神学」における小手先の企てなど「何の益にもならない」。外在的なそれであれ、信仰の側にも内在する内在的な不信仰のそれであれ、「不信仰は、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている〕真理を憎む憎悪であり、そのようにして真理を欠いていることである」。したがって、その「不信仰に対して誠実な仕方でもって出会わない者〔すなわち、「聖書への絶対的信頼」(『説教の本質と実際』)に基づいて、聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている真理をもって、「不信仰に対して誠実な仕方でもって出会わない者」〕——その者は、不信仰が欠いている〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている〕真理でもって不信仰を養うことはできない」。したがってまた、「その者は、不信仰に向かって、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている〕真理を語ることなしに、真理を宣べ伝える時〔そしてまた、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている「真理を語ることなしに」〕「教会が……真理を宣べ伝える時」、不信仰を〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている〕真理に対する新しい憎悪の中に移し、真理を欠いているその苦痛をただ増大させることができるだけである」。したがって、<信仰>の側の人間は、「不信仰〔外在的な不信仰だけでなく、信仰の側にも内在する内在的な不信仰〕を、(中略)不信仰が自分自身を真剣に受け取っているよりももっと真剣に受け取らなければならない……」。「そこでは、ただ一つのことだけが、

〔すなわち、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」(『教会教義学 神の言葉』)の<総体的構造>(『知解を求める信仰 アンセルムスの神の存在の証明』)に基づいて贈り与えられた「信仰が信じている実在の神」だけが、例外である。そこでは、「自然神学の宿命的な……避けられない前提である」「ただ単に見かけだけ不信仰の立場に身を置くということ、教育的見地からのあの遊びをする不信仰の可能性の領域の中へと相手に合わせて身を落とすということは、排除されている」。何故ならば、それが人間論的な自然的な人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、「われわれすべてに対して、信者と不信者に対して、身を落とされる方は、ただその恵みとあわれみの中にあり給う実在の神だけである」からである。詳しく言えば、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な(それ故に、完全に自由な)聖性・秘義性・隠蔽性において存在している(それ故に、われわれ人間は、神の不把握性の下にある)「父なる名の<内>三位一体的特殊性」・「三位相互<内在性>」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」(それ故に、「三神」、「三つの対象」、「三つの神的我」ではない)、「われわれのための神」としての「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方(性質・働き・業・行為・行動、外在本質、すなわち父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事<全体>)における第二の存在の仕方(子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事)、「啓示ないし和解の実在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉(「聖礼典的な実在」としての「最初の起源的な支配的なくしるし>」)、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神(「神の顕現」)にしてまことの人間(「神の隠蔽」、「神の自己卑下、神の自己疎外化」)、「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「イエス・キリストの<名>」——このイエス・キリスト「の中にあり給う実在の神だけである」。したがって、「信者は、〔あくまでもイエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>に基づいて〕そのことを知っている〔信仰している〕ということを通して、不信者から区別される」。「まさに……神がわれわれに対して身を落とされたということに基づいて生きられる生活から信仰は成り立っている」。「<そのこと>が、信仰であるとするならば、したがって信仰の知識は、<そのこと>を知る知識であるとするならば、その時、まさに信者こそが、不信仰を、先ず第一に、とりわけ自分自身の中に見出すであろう」、「先ず第一、自分自身の中にただ不信仰だけを見出すであろう〔その時、まさに信者こそが、不信仰を、先ず以て第一に、自分自身の中に、ただ信仰の側にも内在する内在的な不信仰だけを見出すであろう〕」、「換言すれば〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている〕真理に対する敵意と真理を欠いている姿を見出すであろう」。この時には、「彼は、彼自身の不信仰<と>ほかのものの不信仰に対して、最も深い謙遜さと同時に最高の確信をもって、信仰そのもの」、「むしろ〔イエス・キリストにおける「啓示自身が持

っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて贈り与えられる]彼の信仰が信じている実在の神以外のものをぶつけて行くことはできない。そこでは、「信仰と不信仰、教会と世、したがって信者と不信者の間で起こらなければならない業が問題である」ことからして、徹頭徹尾神の側の真実としてのみあるイエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいた信くと不信の架橋の出来事が、「誠実」で「真剣」な仕方での対話の中で、「出来事となって起こらなければならない」。

「まさに信者こそが、不信仰を、先ず第一に、とりわけ自分自身の中に見出すであろう」、「先ず第一、自分自身の中にただ不信仰だけを見出すであろう」、「換言すれば〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている〕真理に対する敵意と真理を欠いている姿を見出すであろう」その時には、「信者であるからといって、不信仰の対話相手と比べて決して罪深さが僅かであるわけではない人間……の信仰と、それ故に自分たちの信仰に対して何の力も持っておらず、そのようなものとしてまた、自分たちの信仰でもって勝利を収めたり、ほかの者の不信仰を克服する力を持っていない人間の信仰と取り組むことになるということを意味している」。「その中で、彼らが、その対話に足を踏み入れる希望は、〔イエス・キリストにおける「啓示自身が……啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉を持っていることからして、それは聖霊自身の業である「啓示されてあること」としての啓示の主観的可能性として客観的に存在している「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）のことであるが、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動を持っていることからして、〕全くただ、……彼らがなすことができ、全くの率直さと真剣さを持ってなそうとしている信仰についての人間的な証言に対して、神が力添えして下さるであろう証言が欠けることがないであろうということに基づいている」。もっと詳しく言えば、「その中で、彼らが、その対話に足を踏み入れる希望は、全くただ、徹頭徹尾神の側の真実としてのみあるイエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉、その〈総体的構造〉の中での三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の実在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の実在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉（「最初の起源的な支配的なくしるし」）であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、聖霊自身の業である「啓示されてあること」、「キリスト教に固有な」類と歴史性、「聖礼典的な実在」）の関係と構造（秩序性）におけるその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の実在」としての第二の形態の神の言葉（その最初の直接的な第一の「啓示のくしるし」）である聖書（すなわち、イエス・キリスト自身によって直接的に唯一回的特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され装備された預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、

説教)、それからその聖書を、「聖書への絶対的信頼」に基づいて、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、絶えず繰り返し、聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方、純粋な教えとしてのキリストにあっての神としての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」(「教えの純粋さを問う」<教会>教義学の問題、<福音主義的な>教義学の問題) <と>そのような「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての隣人愛(区別を包括した単一性において、<教会>教義学に包括された「正しい行為を問う」特別的な神学的倫理学の問題、純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、神の命令・要求・要請、全世界としての教会自身と世のすべての人々が、純粋な教えとしてのキリストの福音を現実的に所有することができるためになすキリストの福音の告白・証し・宣べ伝え)という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、共同ノ教会」共同性を目指して行くところの、第三の形態の神の言葉に属する教会の宣教における人間的な証言が(このような証言が、たとえただ2、3割にだけになったとしても、このような証言が)「欠けることがないであろうということに基づいている」。「そのようにしてこそ彼らは、不信者に対して、一つには<誠実>に出会って行くことができるし、誠実に出会って行く……」。したがって、「信者たちは、不信者たちに合わせるために身を落とさなければならない必要はない。彼らは、不信者たちに近づくために、いかなる特別な技巧(「自然神学によって規定されている教育的——牧会的」な技巧)を弄する必要もない」。イエス・キリストにおける「啓示自身が啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>を持っているが故に、「信者たちは、まさに信仰の証言を携えてあわれな罪人として、ほかのあわれな罪人……と並んで立つことによって、不信者たちの下にいるのである」。「その時には、信仰と不信はできる限り互いに近くあり、……またできる限り胸襟を開いて相対して立っている」。「その時には、[先に述べた二つの]ディレンマは全く発生することはできない……」。イエス・キリストにおける「啓示自身が啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>からして、「もしも信者が成功を約束する処方箋をはじめから断念していないならば」、「もしも信者が、信仰と関わるのに、あたかも自分の力で左右できる事柄と関わっているかのように振舞うならば、彼の立場は信仰の立場ではない……」。その時には、彼は、「ほかの者を信仰の道に導き入れることが、自分で左右できる力のうちにないとして、……ほかの者を邪道に導くこともしないであろう」、「彼は、ただ人間的な何かをすることができるだけであるとしても、……自分勝手なことをしていないのであり」、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>の中でその自身に聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造(秩序性)における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、「神への愛」<と>「神へ

の愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指して行くという「自分にとって必然的な唯一のことをなすのである」。

そのような訳で、「自然神学によって規定されている」「教育的——牧会的な問いに対する注意深い答え」は、「そこで問題となってくる実践の対象としての人間を念頭に置いても、その際、自然神学が全く用いられ<ない>方が、その対象の人間に対してもっともよい奉仕がなされるという結論に導く……」。何故ならば、「自然神学」は、「神論の基礎づけ」および「神の認識可能性についての理解」ならびに「教育的——牧会的な可能性」にとって「不可避的なもの」ではないからである、「自然神学によって規定されている教育的——牧会的な実践は、その事柄的な目標に関しても、その際、人間によって進み行かれるべき道に関しても、ほとんど信頼に値しない実践でしかない……」からである。「近代における異教徒に対する伝道は、確かに……キリスト教の使信を異教的な現存する思想と結びつけるために、あらゆる種類の自然神学を用いるべきだと信じた長い期間を背後に持っている。しかし、異教徒に対する伝道は、それと関連して、決してよい経験をくしなかった」。エルサレムの伝道会議（一九二八年三月—四月）の結末となった完全な混乱は、そのことの証人である」。

因みに、1928年3月-4月の「エルサレムの伝道会議」については、佐々木謙一「20世紀プロテスタント教会における他宗教への取り組み：第1回IMCから第3回IMCの宣教理念」（東北大学『東北宗教学』、2019/12/31）によれば、次のような議論がなされたということである——（ア）第三の形態の神の言葉に属する教会の「今日の宣教の目的は、非キリスト教である他宗教において、その長所を見ること、彼ら自身の伝統の中にあるすべての長所を発見することである。そして他宗教が持ち続ける伝統的な長所や価値観を否定したりするようなことはしない。なぜなら、その他宗教の中にも神の權威である真理があると考えるからである。また私たちは科学者や芸術家の努力の成果である世界の世俗化も認める。なぜならそれらすべてがキリストによる世界への貢献であると考えからである。世俗化はこの世の迷信や無知に引き起こされる世界のよくない状態を打ち破ってくれると考えている」、（イ）「われわれはイエス・キリストの中に、すべての人を照らす光が、その完全な輝きにおいて、照り出でている故に、キリストの知られていないところ、あるいは拒否されているところにも、同じ光が射し込んでいることを、見出して喜ぶものである。われわれは、クリスチャンでない〔生来的な自然的な〕人々や諸体系の中にあるすべての高貴な資質をその御子を世に送り出し給うた父なる神は、いかなる場所においても、ご自身を証示し給わないことはないということの証拠として歓迎するものである」。

その議論においては、第三の形態の神の言葉に属する「今日の宣教の目的」が、まさに「『自然』神学」に基づいて定められていると言うことができる。したがって、第三の形態の神の言葉に属する「今日の宣教の目的」を遂行するにあたって、先ず以て、まさにそれは聖書のことであるが、第二の形態の神の言葉である<使徒>・パウロの「わたしは、神からいただいた恵みによって、〔第二の形態の神の言葉に属する<使徒>として〕熟練した建築家のように土台を据えました。そして〔第三の形態の神の言葉に属する〕他の人がその上に家を建てています。ただ、〔聖書こそが教会に宣教を義務づけている〕その教会の宣教は、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての神、その神の啓示、その神への信仰を対象としている限り、〕おのおの、どのように建てるかに注意すべきです。〔啓示ないし和解の实在〕そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉である〕イエス・キリストというすでに据えられている土台を無視して〔恣意的独断的に「わがまま勝手に」、だれもほかの土台を据えることはできません（Iコリント3・10-11）」と語られているところに置かれていない。したがってまた、「教会の宣教の目的」が、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>からして、その<総体的構造>の中での、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の实在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在しているところの、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な（それ故に、完全に自由な）聖性・秘義性・隠蔽性において存在している（それ故に、われわれ人間は、神の不把握性の下にある）「父なる名の<内>三位一的特殊性」・「神の<内>三位一体的父の名」・「三位相互<内在性>」における「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」（それ故に、「三神」、「三つの対象」、「三つの神的我」ではない）の、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な「三つの存在の仕方」（性質・働き・業・行為・行動、外在的本質、すなわち父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体）における第二の存在の仕方（子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事）、すなわち「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉（「最初の起源的な支配的なくしるし>」）、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神（「神の顕現」）にしてまことの人間（「神の隠蔽」、「神の自己卑下と自己疎外化」）、「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「ただイエス・キリストの<名>だけ」——このイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、聖霊自身の業である「啓示されてあること」、「キリスト教に固有な」類と歴史性、「聖礼典的な实在」、客観的な「存在的な<ラチオ性>」）の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性におけるその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の

形態の神の言葉（その最初の直接的な第一の「啓示のくしるし」）である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、絶えず繰り返り、聖書の聞き教えられることを通して教えるという仕方で、純粋な教えとしてのキリストにあっての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」（「教えの純粋さを問う」＜教会＞教義学の問題、＜福音主義的な＞教義学の問題）＜と＞そのような「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」（区別を包括した単一性において、＜教会＞教義学に包括された「正しい行為を問う」特別な神学的倫理学の問題、純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、神の命令・要求・要請、すなわち全世界としての第三の形態の神の言葉に属する全く人間的な教会自身と世のすべての人々が、純粋な教えとしてのキリストの福音を現実的に所有することができるためになすキリストの福音の告白・証し・宣べ伝え）という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指して行くというところに置かれていない。したがってまた、その議論においては、「『自然』神学」の＜立場＞から、「非キリスト教である他宗教に……その長所を見ること」、「彼ら自身の伝統の中にあるすべての長所を発見すること」、「そして他宗教が持ち続ける伝統的な長所や価値観を否定したり……しない」ということに重点が置かれている。言い換えれば、「『自然』神学」の＜立場＞から、「今日の宣教」の対象を、神とは異なる「実在全体」——すなわち、宇宙を含めた天然自然としての外界、自然の一部としての人間の自己＜身体＞、性としての他者＜身体＞、個体的自己としての全人間の身体（肉体）と身体を座とする精神（意識）を介した普遍的で実践的な全自然（自然の一部としての人間の自己＜身体＞、性としての他者＜身体＞、宇宙を含めた天然自然としての外界、さらに言えば人間化された自然としての人間的な自然）との相互規定的な対象的活動によって生み出されるところの人間的自然である人間の物質的および観念的な諸生産物（マルクス『経済学・哲学草稿』）としての「存在者」に置いている、逆に言えば第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての神、その神の啓示、その神への信仰に置いていない。このような訳で、「『自然』神学」の＜立場＞から発言している彼らは、＜信＞と＜不信＞を二元論的に分離し対立させている。したがって、彼らは、その最初から、第三の形態の神の言葉である教会に属するわれわれは、徹頭徹尾神の側の真実としてのみある主格的属格として理解されたローマ3・22、ガラテヤ2・16等のギリシャ語原典「イエス・キリスト＜の＞信仰」（「イエス・キリスト＜が＞信ずる信仰」による「神の義、神の子の義、神自身の義」そのもの、「律法の成就」・「律法の完成」そのもの、「成就と執行、永遠的実在としてある」成就され完了された個体的自己としての全人間・全世界・全人類の究極的包括的総体的永遠的な「救済」そのもの、それ故に「平和に関するバルトの書簡」によれば「平和」そのもの、「神ご自身によって確立された和解、神と人間……



また人間とその隣人との平和」そのもの)において、<信>と<不信> (外在的な不信および信仰の側にも内在する内在的不信) を架橋されたところのイエス・キリスト、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている「啓示ないし和解の実在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身—この「一つの事柄に仕えなければならない」のであって、ひとつの党派〔学派、教派、非キリスト教、思想傾向、時流、「同時代の人たちの思考の前提」や「そこから形成された理解の規準」、類的機能を持つ生来的自然的な自由な人間的理性や際限なき人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された人間の観念的生産物としての人間の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」としてのさまざまな主義や主張〕に仕えなければならないことはない……、一つの事柄に対して自分の立場を区別しなければならないのであって、別な一つの党派に対して自分の立場を区別しなければならないわけではない……」（『教会教義学 神の言葉』）ということ「よく理解していない」のである。どのような領域であれ、「対立する双方に真理がある」というような俗説が、世界史的に流布され、流通している中で、<自らの立場>において、両者を包括し止揚しなければならないということが<思想的な問題>である（吉本隆明『どこに思想の根拠をおくか』「思想の基準をめぐって」）ということ「よく理解していない」のである。

また、その会議では、父なる神が「ご自分を証示し給う……証拠としての」「クリスチャンでない〔生来的な自然的な〕人々〔の例えば知識的な道徳的な倫理的な高貴な資質〕や諸体系〔の高貴な資質〕」を「歓迎する」し、「科学者や芸術家〔すなわち、自然科学系および人文科学系の知識人〕の努力の成果である世界の世俗化も認める」ことが議論されたということであるが、そのことは、キリスト教的主観やあるいはキリスト教的組織が「認める」という問題ではない。何故ならば、例えば「諸体系」や「科学者や芸術家の努力の成果」は、生来的な自然的な個体的自己としての人間の類的な活動や生活における、生来的な自然的な個体的自己としての人間の歴史的行為における、生来的な自然的な個体的自己としての全人間の身体（肉体）と身体を座とする精神（意識）を介した普遍的で実践的な全自然（自然の一部としての人間の自己<身体>、性としての他者<身体>、宇宙を含めた天然自然としての外界、さらに言えば人間化された自然としての人間的な自然）との相互規定的な対象的活動によって生み出されるところの人間の自然としての人間の物質的および観念的な諸生産物のことであり、その<全体>の中の一部であるからである、「歴史の継起」としての個体的自己の成果の世代的総和のことであり、その<全体>の中の一部であるからである。倉松功は、『ルターとバルト』で、「われわれの結論」でもあるとして、次のように述べている——「『ルターによれば文明の建設と発展は理性・知能の課題であり、全人類の課題であり、特定の宗教の特権ではない。ルターの二つの統治の区別

は、かれの文明論の恒常的基礎である。その区別が人間の責任と活動の分野を自由にしている。(中略)被造物的・生物的現実……の中にわれわれに直接出逢う当為の要求が自然に存在する。その要求こそ心に記された理性の基本的規範である。ルターによれば、こうした文明の体系は全体として、神律的側面と相対的に自律的な側面とを持っている。神律的というのは、文明を担う諸力は神の恒常的創造者としての活動であるという意味……相対的に自律的だというのは、神の創造者としての働きは人間理性によって把握されるからであり、理性に基づく、人間の神との<共働の行為>は自発的に形成されるからである』。「ルターによれば文明の建設と発展は理性・知能の課題であり、全人類の課題であり、特定の宗教の特権ではない」と意味ありげに述べているが、そのことは当たり前のことであり、それ故にもっと客観的な正当性と妥当性をもって言えば、経済社会構成の拡大・高度化、科学や技術の進歩・発達、その知識の細分化と増大、生活の利便性の向上等という「文明の建設と発展」は、自己<身体>として、性としての他者<身体>として、**人間は自然の一部であるように、人類史も自然史の一部であり、その自然史の一部としての人類史の自然史的過程における<自然史的必然>としての自然史的成果である。**その自然史的成果は、さまざまな観念諸形態を生み出すし、そしていったん生み出された観念はそれ自体の展開過程を持つのである。現在危機のただ中にあるとは言え、人類史の頂点における現存する<主たる>経済社会構成は資本主義であり、人類史の頂点における現存する文化はその水準に規定された西欧文化である、すなわち現在危機のただ中にあるとは言え、世界普遍性を獲得した西欧<近代>である、というように言うべきである。要するに、そのような議論の方向性は、結局、「『自然』神学」へと向かうところにあるのである。そして、その「『自然』神学」は、自分にとって都合の悪いことは真剣に取り扱おうとしないのである、耳を塞ぐのである。例えば、「『自然』神学」の<段階>で停滞した思惟と語りにおける神、神の啓示、神への信仰は、類的機能を持つ自由な人間的理性や際限なき人間的欲求やによって対象化され客体化された人間的な観念的生産物としての人間の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」、「存在者レベルでの神」、「存在者レベルでの神の啓示」、「存在者レベルでの神への信仰」に過ぎない、という客観的な正当性と妥当性をもって根本的に包括的に原理的にキリスト教批判を行ったフォイエルバッハのキリスト教批判を真剣に受け止めようとはしないのである、耳を塞ぐのである。何故ならば、「『自然』神学」の<立場>においては、その客観的な正当性と妥当性をもって根本的に包括的な原理的なキリスト教批判を、客観的な正当性と妥当性をもって根本的に原理的に包括し止揚することは全くできないからである——「人間の内的生活は、自分の類・自分の本質に対する関係における生活である。人間は思惟する、すなわち人間は会話をする、人間は自分自身と話をする。動物は自分以外の他の個体がいなければ類的機能をひとつもはたすことはできない、しかし人間は他人がいなくとも考えるとか話すとかという類的機能……を果たす

ことができる」、それ故に「もし君が無限者を思惟するならば、そのとき君は思惟能力の無限性を思惟し且つ確証しているのである。そして、もし君が無限者を情感するならば、そのとき君は感情能力の無限性を情感し且つ確証しているのである。〔何故ならば、〕理性の対象とは自己自身にとって対象的な理性であり、感情の対象とは自己自身にとって対象的な感情である」からである、それ故にその時「(中略) 神の意識は人間の自己意識であり、神の認識は人間の自己認識である」、それ故にその時「(中略) 神の啓示の内容は、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての〕神としての神から発生したのではなくて、人間的理性や人間的欲求やによって規定された神から発生した〔すなわち、類的機能を持つ自由な人間的理性や際限なき人間的欲求やによって対象化され客体化された人間的自然(人間の観念的生産物)としてのその人間の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」、  
「存在者レベルでの神」から発生した〕……〔それ故に、その「存在者」レベルでのその神、その神の啓示、その神への信仰は、類的機能を持つ生来的な自然的な人間の自由な自己意識・理性・思惟によって対象化され客体化された彼の観念的生産物としての彼自身の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」、「存在者レベルでの神」、「存在者レベルでの神の啓示」、「存在者レベルでの神への信仰」である〕。  
(中略) こうして、この対象に即してもまた〔近代主義的自由主義的プロテスタント主義的なシュライエルマッハーの〕『神学の秘密は人間学以外の何物でもない!』……」ものである(ルートヴィッヒ・フォイエルバッハ『キリスト教の本質』)。その時には、例えば、ハイデッガーから、「……『いわゆる存在者レベルでの神への信仰は、結局のところ〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての〕神を見失うこと……』……」であるから、「それよりは『むしろ無神論という安っぽい非難を受け入れた方がよい』」、と客観的な正当性と妥当性をもって根本的包括的に原理的に批判され「揶揄」されてしまうほかはないのである。このことが、「『自然』神学」の<段階>で停滞した思惟と語りをする神学者(例えば、ルドルフ・ブルトマンがそうであった)、聖職者、牧師、キリスト教的著述家には「よく理解できない」のである。